

# 日本近代のエートスの研究

—横井小楠から明六社へ— (1)

上 原 三 至

## 序 論

日本列島津々浦々に確たる足跡を刻印していった先人達の生きざまや思想を再発掘してみたい、そのような思いに駆られて永年、私は彼ら縁りの栖を訪ね文献等を渉猟し、それぞれの風土に根差したエートスを発見すべく全国を歩いてきた。

1993年晩秋の或る日、私は独り肥後路を訪ねた。日本近代思想を学ぶ者にとって、近代日本黎明期の縮図ともいえる熊本は大いに興味を喚ぶ土地柄なのだ。

幕末の藩学から近代へ移行する瀬戸際の和洋混在した教育・郷党連の跋扈など朋党・敵討ちを美風とする気風の下、藩校時習館を舞台に旧態依然たる学校党と進歩派である実学党との確執が繰り返され、それに無条件攘夷派の勤王党が絡む複雑な思想地図。

実学党の逸材で、朱子学者でありながら開明進取の精神によって朱子学の思弁性を批判し、わが国近代思想の基の一端を培った横井小楠。しかし、皮肉にも彼は、学校党が実権を握る藩当局から疎まれ続け、藩内での発言権は全くなく、晩年には士籍まで召し上げられてしまうのであるが。

熊本東郊、沼山津に寓居する小楠を訪ねてその薫陶をうけ、それぞれ『沼山対話』、『沼山閑話』を遺した井上毅と元田永孚。共に実学党の出で、明治中期、教育勅語草案作成に当たるが思想的には対照的な二人。法務官僚として立憲君主制に基づく明治憲法起草にも参画し明治国家最大のブレインと称された井上。一方、明治天皇の侍

講となり君徳輔導の儒者として殷賑を極め、勅命によって著した『幼学綱要』で、報恩を媒介として第一に孝行、第二に忠節を至上の徳目と説き、帝王は臣民を教化する聖徳の所有者であるとの立場を陋固として墨守しつづけた元田。

「余輩嘗テ西教ヲ学ブニ頗ル悟ル所アリ爾後之ヲ読ムニ益感發シ欣載措カズ遂ニ此ノ教ヲ皇国ニ布キ大ニ人民ノ昧蒙ヲ開ント欲ス、然リト雖モ西教ノ妙旨ヲ知ラズシテ頑乎旧説ニ浸潤スルノ徒末ダ尠カラズ、豈慨嘆ニ堪ユベケンヤ、是時ニ当リ苟モ報国ノ志ヲ抱ク者ハ宜ク感發興起シ生命ヲ塵芥ニ比シ以テ西教ノ公明正大ナルヲ解明スベシ、是吾曹ノ最モカヲ竭スベキ所ナリ、故ニ同志ヲ花岡山ニ会シ同心協力シテ此ノ道ニ従事センコトヲ要ス  
——後 略——

千八百七十六年第一月三十日、日曜日誌トナン」  
との「奉教趣意書」<sup>(1)</sup>を掲げ、熊本洋学校の雇い米人教師ジェインズ元大尉を中心に生徒30数名が現在の JR 熊本駅北方にある標高132メートルの花岡山山頂で誓約結盟した熊本バンド。署名者の中には、徳富猪一郎（蘇峰）や海老名弾正、浮田和民らと共に、横井小楠の子息時雄（のち同志社々長）の名がみえる。結盟場所に花岡山を選んだのは、ボヘミアの宗教改革者 J.フスたちがタボル山上で盟約した故事に倣ったのだという。

同年（明治九年）十月、熊本バンドとは思想的に反対の極に位置する敬神尊攘を信条とする一団百七十余名が、秩禄処分、廃刀令を契機に、歴史の歯車を逆転させるがこどき騒擾を惹起した神風連の乱。

第五高等学校（現在の熊本大学）で英語教師として教

壇に立ったラフカディオ・ヘルン（明治24年から3年間）と夏目漱石（明治29年から7年間——その間2年6ヶ月ロンドン留学）。後年、漱石はヘルンの後任として東京帝国大学文科大学に転ずるが、熊本での生活体験や自然との交情を『草枕』・『二百十日』という名作に結晶させた。

熊本郊外の小作農兼日雇の家に生を受け、下積の労働者として貧苦を重ねながら文学に志し、当時五高の学生で新人会会員林房雄を知るが、後上京し印刷工をしながら、氷川下の貧民街をモデルに『太陽のない街』を発表したプロレタリア作家徳直直。

「母系制の研究」・「招婿婚の研究」など日本女性史の研究に特異な業績を残した詩人高群逸枝、その信念を貫く火の国の女の生きざま。等等枚挙にいとまがないほど熊本周辺には食指をそそる研究課題が転がっている。

更に忘れてならない、否第一に挙げるべきであったのは、徳富蘇峰・蘆花兄弟の存在であろう。彼等を語らずして、日本近代の国民の思想や文化を説明できないといっても過言ではないからである。

兄猪一郎（蘇峰）は、14歳にして先の熊本バンド誓約結盟に名を連ね、若くして居村大江村に「自由ニシテ生徒ノ自治ニ任セ」<sup>(2)</sup> する大江義塾を開いた。その後上京して明治20年、民友社を創立し明治期を代表する総合雑誌『国民之友』を刊行（明治20年2月——32年8月）、次いで明治23年『国民新聞』を創刊して、以後昭和4年迄その社長・主筆を勤めた。その間、彼は在野のオピニオン・リーダーとして国民の広汎な知的部分と結合し、自由・平等、平民主義と社会生活の近代化の動向に多大な影響を与えた。

蘇峰の率いた民友社の活動は、明治初年の啓蒙思想団体明六社の先進的知識人によるいわば学会的な閉鎖性を帯びた活動とは異なり、自由民権運動の伝統を継承して、西洋近代の自由主義・個人主義の精神を広く国民のなかに土着化しようとする国民的な文化運動であったといえよう。

しかし、日清戦争後の三国干渉（明治28年）に対する反撥・危機感を契機として、蘇峰はしだいに帝国主義的国家主義に傾斜し（「蘇峰の変節」）、さらに第二次大戦中は大日本言論報国会会長として国内の言論統一を推進し、

国民統合のシンボルである天皇を中心とする精神的紐帯を鼓吹するようになっていった。

弟健次郎（蘆花）は、16歳の時、母の勧めでメソヂスト教会で洗礼を受け、のち熊本英学校に奉職。明治22年、上京し兄蘇峰が主宰する民友社に勤めるが、6年後、『国民新聞』に連載した『不如帰』で文名を得、ついで、『自然と人生』、『思出の記』を発表した。その後、民友社を離れ黒潮社を設立して『黒潮』を著わし、国木田独歩等とともに明治30年代を代表する作家となった。

ところが、明治38年、富士山頂で数日間人事不省に陥るという「心的革命」を経験して生活態度や創作活動に大きな変化が訪れ、明治40年実存的な真なる自己を求道する蘆花は、武蔵野の一角千歳村粕谷で田園生活を始め「生活即芸術」を実践していくことになった。

その集大成が『富士』（未完）となるのであるが、それら文学作品のみならず、キリスト教的人道主義に基づく彼の実存そのものが明治・大正を独自に生きた知識人の一典型であり、また永遠の順礼者として人々に深い感動を与えた。

水俣の惣庄屋兼代官の家に生まれ熊本に育った蘇峰・蘆花兄弟は、いろいろな意味で熊本以外では決して生れ得なかったと思われる典型的肥後人「肥後もっこす」なのである。

これまで述べたように、維新期、洋学では他県に遅れをとった熊本であったが、文学者、思想家、宗教家など人文分野で優れた人材を輩出しているのである。

11月とは思えぬ薄らと汗ばむ陽気の中を私は、熊本市大江4丁目の徳富記念館から更に東南にある横井小楠記念館に向った。市内電車の終点健軍駅で降り国道沿いの裏道を小1時間程歩く。130年前、小楠に教えを乞うため、若き井上毅は同じこの道を通ったであろう。眦を決して日本の将来を見据えながら足早に歩く井上の姿が彷彿する。杉の巨木が繁る小楠公園に着く。悲運な死を遂げた小楠の遺髪が葬られていると聞く。一隅に蘇峰が書した顕彰碑が屹立していた。

公園から南へ10分程引き返すと、木山川を背にして代官屋敷の如き大きな黒門が目に入った。記念館らしいが何か気圧されて入りづらい。今は市の教育委員会の所管

とのことだが、この鉄鋌を打った樗造の堅門は小楠のパーソナリティに似合わぬなどと思いながら中へ入る。すぐ際に、遺品や書簡類などが納められている2階建ての記念館が在り、その奥に小楠晩年の寓居四時軒が簡素な佇いを見せていた。小楠は、沼山津の四季折々に移ろう自然を愛して四時軒と名づけ、雅号を沼山と称したのである。

「客稀にして柴門をとじて開かず、閑園に杖をひき幾吟回。日仙岳に沈み暮霞紫なり、たまたま西窓に坐して酒杯を呼ぶ。……」

平原渺々たり荒村の夕べ、一片の閑雲遠峯をわたる。」  
横井小楠「偶興12首」の中。<sup>(3)</sup>

家屋の裏手に回ると、眼前に水が浅くて藻の多い木山川が流れて水田が拡がり、数十キロの平野を隔てて飯田山、釈迦院岳、甲佐岳、木原山などの峯々が屏風状に並び、東には遙かに阿蘇の噴煙を眺め、よく晴れた日には西に島原湾を隔てて雲仙岳がうっすらとみえる。正に渺莫たる景観であるが、この沼山津の地に小楠は藩庁によって塾居を命ぜられ、幕末のぎりぎりの激動期を満4年以上も中央政局から遠ざけられ、思いを世界に馳せながら不本意にも隠棲していたのである。

「君聞かずや、洋夷各国治術明らかなり。励精よく上下の情に通じ公に人材を選び俊傑を挙ぐ。事あれば衆に詢ひて国論平らかなり。うすく税斂をとりて民貧しからず。厚く錢糧を貯えて勁兵を養ふ。われ聞く敵国の強きは我の力たり。今にして警戒し国を興すべし。危をたすけ傾を起すにその人あらん。閑人といへどもまさに閑園を払ふべし」『小楠堂詩舛』<sup>(4)</sup>

幕末から明治中期に至る大規模な歴史的変動の坩堝の中で、多くの優れた志士、経世家が排出したが、その中で儒学者横井小楠は、佐久間象山とともに幕末における先駆的な役割を果たした開明的思想家として並び称されてきた。

ここでは先づ、横井小楠の思想が日本近代の倫理思想に如何なる影響を与えたかを佐久間象山（信濃松代藩）と比較しながら論ずることにしよう。ちなみに小楠は、徳富蘇峰・蘆花兄弟の父一敬の師であり、母方の叔父に当るのである。

研究の詳細は本論で述べるが、ここで一、二重要と思われる点を指摘しておきたい。

周知のごとく、佐久間象山のいわゆる「東洋の道德、西洋の芸術、精粗遺さず、表裏兼該し」（『省録』<sup>(5)</sup>）という西洋文化摂取の態度が、いくらかのバリエーションを加えることによって、明治期の日本の指導原理となっていた。それに対して、横井小楠の儒教思想の深化や変容によって西洋の思想や文化を受容しようとする態度、一例を挙げると、民意の尊重・社会福祉の重視という西洋近代の政治原理を儒教的な仁政の観念に符号するものと捉えてそれを評価する（『国是三論』）立場は、福沢諭吉、西周、加藤弘之、津田真道などの明六社同人や大隈重信さらには自由民権派の植木枝盛、中江兆民、大井憲太郎等によって全面的に否定され克服されていった。

換言すれば、小楠の経綸の問題点である「道德と社会の未分化」を超克することによって、維新をリードする思想が育成されたといつてよい。

しかし、象山の主張する、東洋の伝統的儒教道德と西洋の実証的科学技術それぞれの長所を採り入れ両者を兼備することによって、日本の独立と国力の伸張を計ろうとする思想は、後に採長補短主義、改良主義の名の下に国策化され、「殖産興業」、「富国強兵」のスローガンとともに永く日本近代の精神史を占有し、「和魂洋才」の様式を形成していったのである。

すなわち、西洋近代文化の受容にあたって、専らそれを芸術（技術）として理解し、西洋近代文化を育てた近代市民社会の精神や倫理に学ぶという謙虚な態度を忘れた単なる技術や外的制度の導入は、東洋の道德に対する深刻な反省を蔑ろにさせ、先進国日本の道德を永く封建的レベルに放置されることとなった。

はたして、わが国の近代化にはこのような進路しかなかったののだろうか。種々限界はあるが、小楠の宋学への疑問、封建制度の粹を取り外そうとする試み、西洋近代の思想や文化に対する柔軟な思考などに学ぶべき点はなかったのか。ちなみに小楠は、キリスト教を邪教として頑迷に排撃するのではなく、それが西洋の政治・教育・道德の精神的基盤であることを認めて、熱心にまた公正にキリスト教を理解しようとした。それがため、後述す

るように小楠はキリスト教信者と誤解され、非業の死を遂げるのであるが。

## (一) 横井小楠

——朱子学の近代的開眼——①

幕末・維新の転換期は、正に新旧思想の交流・格闘の時期であった。思想家たちは、新しい思想と古い思想との矛盾や交錯と闘いながら、その緊張感の上に自己の思想と行動を形成していったのである。

儒学者横井小楠は、先に述べたように佐久間象山とともに、西洋文明導入の先駆的な役割を果たした開明的思想家であった。

その開明性を一言すれば、わが国に千数百年連綿として続いた儒教的視座を近代的方向に変革しようと儒教の側から試みた点にあらう。

小楠は終生、醇乎として儒者としての基本姿勢を崩さなかったが、文明が発達した今日の現実社会に全く適合しない思弁的な正統朱子学に疑問を投げ、そこから朱子学を乗り越え、自らの主体的思想を形成しようと努めた。つまり彼は、学問する主体自身の生き方に関わる問題として儒学に相対したのである。彼は、儒教諸学派を批判的に継承しながら儒教の根源に溯及し、堯舜三代の治道とそこに開示された天地間の普遍的な理に従い、その理を基準として現実の政治改革に取り組んだのである。要するに、グローバルな天地普遍の理の存在を確信し、その道理の実践を志したところに儒者小楠の面目があったといえよう。

嘉永6年(1853)6月の黒船来航が象徴する西洋文明のインパクトに対し、小楠はそれを単に国家体制の危機として受け止めるのではなく、同時に儒教に対する思想的インパクトとして受け止めた。彼は、政治・経済・倫理思想としての儒教を深化し変容することによって、それに対応すべきと考え、そのために進んで西洋の思想や文化を理解し、批判し、その長所を摂取・受容しようと試みたのである。

すなわち、小楠は徒に西洋を夷狄として排撃するのではなく、西洋の政治、経済、テクノロジー、学問、宗教、道徳などをつぶさにまた謙虚に学び、そこに存在する理

を探究する(「格物致知」)ことが、彼が儒者として生涯求め続けた聖人の道に連関すると固く信じていた。それはまた、朱子学の本質である「性理の学」へ回帰するものでもあった。

このような当時の儒者としてはかなり柔軟な思想を、小楠がもちろん初めから身につけていたわけではない。

横井小楠(幼名又雄、名は時存、字は子操、通称平四郎)は、文化六年(1809)8月13日、熊本内坪井で肥後藩士横井大平の次男として生れた。横井家の収入は世禄150石と目付として足高50石の計200石であったが知行の実収は23石4斗<sup>(6)</sup>にすぎず生活は苦しかった。その上、小楠は次男である。当時、知行を与えられるのは原則として嫡男に限られていたから、次男以下は文武両道によほど秀いでない限り一生無収入で家の厄介者となる宿命であった。

そのような行き先灰色の人生に抗するように小楠は、藩校時習館で文武の道に精進し25歳で英才コースである居寮生に選ばれ、28歳で講堂世話役、29歳で居寮長(塾長)に抜擢され年米10俵を受けるという時習館開学以来の秀才振りであった。当時、居寮生であった元田永孚は「横井先生の塾長として生徒を誘導する、大いに發揮するところあり。一時の盛なる生徒みな奮進、志をあわせ相ともに親睦を主とし、悖戾するところなし。月に1回親睦会をおこし、杯酒欣飲、さらに心肝を披豁して隠忌することなし。」(『還暦之記』<sup>(7)</sup>)と回顧している。

しかし、経学より詩文を重んじ末梢的なことばかり研究する時習館の学統に、小楠はかねがね疑問を感じていたが次第に歴史学や経世の問題に強い関心を持つようになる。元田は同じく『還暦之記』に、小楠が元田に与えた学問上の注意を次のように書き留めている。「凡そ学問は古今治乱興廃を洞見して己れの知識を達するにあり。須らく博く和漢の歴史に涉り近小に局すべからず。廿二史の書等一読すべし。然らざれば経国の用に乏しく共に為るに足らず。且文章を学ぶべし。吾見る所を陳べ志す所を達するは文章に在り。」<sup>(8)</sup>

天保10年(1839)、31歳の小楠は藩命で江戸に留学することとなった。異例の抜擢である。江戸で小楠は諸藩留學生の慣例に習い幕府における学事の総元締め林家に入

門、塾頭佐藤一斎と対面した。小楠の滞府記録『遊学雑志』<sup>(9)</sup>（天保10年4月～同11年2月）をみると彼は諸藩の儒者たちの研究懇親の会海鷗社文会に顔を出す傍ら、幕府の能吏川路聖謨、肥後出身の碩儒松崎慊堂、水戸藩の藤田東湖など当代一流の人々の門を叩いている。

小楠が「学問博大、胸中幾万卷の貯えあることを知らず」<sup>(10)</sup>と学殖において最高と評する松崎慊堂は熊本東南郊10キロ御船川の辺木倉の出身で、当時世を騒がせていた「蛮社の獄」（封建勢力と西欧知識を学んだ蘭学者との最初の衝突）に連座した門人渡辺崋山を最後まで救援した儒学者でもあった。同郷の誼もあってか小楠は慊堂を心の師と仰いでいたようだ。官学林家の代表佐藤一斎を「ものなれたる容子言外に見ゆるなり……………当時大儒一斎・慊堂と唱ふれども、その実は一斎なかなか慊堂におよばず。ただ一斎人物聡敏、世事に鍊達す」<sup>(11)</sup>と手厳しく評し、また大学頭林述斎一門の学流を「いわゆるかの濟世の学流にて、御政事の格式古事、または是非黒白の議論などに心がけは絶無のこと」<sup>(12)</sup>と出世のための学問に墮し経世済民の理想を欠いていると批判する小楠の言葉の端々に、彼の門地門閥に囚われぬ人間観、実学への傾斜を読みとることができる。

また小楠は後期水戸学の泰斗藤田東湖とも親しく往来し、啓発されること大であったようだ。「この人弁舌さわやかに議論はなはだ密、学意は熊沢蕃山・湯浅常山などにて、程朱流の究理をきらひ、もっぱら事実心に心懸けたる様子なり」<sup>(13)</sup>と実学の同志として尊敬し、「当時諸藩中にて虎之助（東湖）ほどの男は少なかるべし」<sup>(14)</sup>と、のちに東湖が江戸大地震〔安政2年（1855）〕で圧死する迄肝胆相照らす仲として文通を続けることとなる。

はじめは実学的見地から東湖に接近した小楠であったが、尊王攘夷論、王道的経済思想等朱子学を中心に国学・神道をも総合した水戸学的精神風土にも、決してそれ一辺倒ではなかったが引きつけられていったようだ。

当時の革新的な青年武士達の多くがそうであったように、若き小楠もまた御多分にもれず頑迷な攘夷主義者であったのである。

翌年、不幸なことに、小楠は酒の上での失敗を理由に帰国・逼塞を命ぜられ、父の家督を継いだ知行150石、手

取米30石足らずの貧乏藩士である実兄の部屋住みとして謹慎する身の上となった。小楠は酒が入ると“横井の舌剣”と後に木戸孝允が評したほど舌鋒鋭く辛辣に政治批判をする癖があった。それを藩の保守派に疎まれたのであろう、無事留学を終了すれば時習館の教授に採用されること先ずまちがいない出世コースを棒に振ったのである。しかし、失意の中にも小楠は、孔子の言「古之学者己為 今之学者人為」を胸に、「名利の心を猛省し、事を処する我無きを欲し」ながら、夏・殷・周3代の治道、堯舜の道、孔子の学、正大公明の実学の習得に精励した。「其講学する所は誠意正心の実、心術の微より工夫を下し、閨門の内人知らざるの地に専ら力を用ひ、治国安民の道、利用厚生の本を敦くして決して知術功名の外に馳せず。眼を第一等に注げ聖人以下には一步も降らず、日用常行、孝第忠信より力行して直に三代の治道を行ふべし。是乃堯舜の道、孔子の学、其正大公明真の実学にして世の人之を知る鮮し。俗儒は記誦詞章に拘して修己治人の工夫を知らず。政に預る者は法制禁令の末を把持して治国安民の大道を知らず。……………唯勉めて己れの知識を進め、己の心を正ふし、其氣質を変化して各聖賢の地位に到るべしと。」（このパラグラフの引用すべて元田永孚『横井小楠』上巻から）70日の逼塞という窮地の中、小楠は門を閉ざして思索に専念し、熊沢蕃山・王陽明・大塚退野・李退溪・程子・朱子と遍歴した自己の学問に根本的な検討を加えはじめた。程子・朱子の精読から致知格物して実践躬行を重視、程朱から遠く孔子・孟子に学流をさかのぼって王道を明らかにし更に普遍的な天道を究明しようとしたのである。

天保12年（1841）、小楠は、米田是容（長岡監物）、元田永孚、荻昌国、下津休也等と一つの学問的・思想的結社を旗上げし、二、三日に1回は、講学の会合を持つようになった。学問と現実の社会を直結することを主眼に青年（小楠33歳、下津34歳他は二十代）たちは、朱子の『通鑑綱目』、『近思録』などを会読し、修身齐家治国平天下の道について討論を重ね、しだいに同志を加え実学党と呼ばれるようになった。

この頃の小楠の朱子学は、陽明学を烈しく排斥した林羅山系のそれではなく、朝鮮の朱子学者李退溪の系譜を

引く肥後藩の先輩大塚退野・平野深淵など理想主義的な経学を継承し、また陽明学者熊沢蕃山のこれまた理想主義的経世済民論から多くを学んだものであった。「漢儒以後謬伝してその道をうしなひ、宋にいたり周程・張朱はじめて千載不伝の学を得て、しかして後來よくその真伝を得るものほとんど希なり。わが邦の学、古昔は論ぜず、慶長以後儒者輩出すといへども、脩己治人道德経綸、真に道を学びえたるは熊沢先生にして、その後はわが藩の先輩大塚退野・平野深淵二先生のみ」<sup>(15)</sup>

朱子の正統をもって任ずる小楠が、すなわち王陽明か朱子かの二者択一にせまれ朱子を採った彼が、陽明学者熊沢蕃山に傾倒している点奇異な感がしなくはない。一般的に思想史上、体制擁護の理学である朱子学と反体制的性質の心学である陽明学とは対立する思想と考えられているからであるが、小楠は学派を超えて朱子学の「居敬窮理」（心を専一にして事物につき理を究める）も陽明学の「致良知」（人間の心に備わる純一無雑な道徳的直観力の発動により行為を起し事物に及ぼす）も止揚とまでいかずとも総合的に理解しようとしたのではないか。特に、王陽明の汎愛的ヒューマニズムの思想「万物一体の仁」を受け継いだ蕃山が「人は皆天地の子孫であるから、元来身分の賤しいという者はいない。王者以下みな兄弟であり、君主以下士農工商の人倫は職能身分である」として身分的貴賤の差別を否定した『夜会記』巻一・『集義和書』巻八・『孝経外伝或問』一之上などの書を読み強い感銘を受けたのである。この思いが、後年小楠をして次のような有名な漢詩を書かせることになるのだが。

人君何天職	代天治百姓
自非天徳人	何以愜天命
所以堯舜舜	是真為大聖
迂儒暗此理	以之聖人病
嗟乎血統論	是豈天理順

「沼山閑居雜詩」安政4年（1857年）<sup>(16)</sup>

それはともかく、陽明学、朱子学を経由して、効用性、実用性を重視しながらそれを仁という高次の倫理的機能で包摂するという、いわば功利性を超越した小楠独特の実学が形成していくのである。

一方、実学党の活動は実学の探究のみならず、在来の

旧態依然たる藩校時習館の制度や文義の研究と字句の穿さくにあけくれる学風を批判、詞章記誦の学を捨て実践躬行を本領とする改革運動へと発展し、世にいう実学党と守旧派学校党の確執が始まるのである。

「大塚退野の学風に帰れ」をスローガンとする小楠の実学は、朱子の格物窮理の主張を現実の社会に適応した実践的な経学であって、さらに彼の窮理は朱子の窮理を超えて、時間・空間・位置に適応した政治原理の究明という方向に拡大しうる可能性を有している。したがって、実学党と学校党の対立は必然的に政治にもちこまれ、郷党朋党を好む風土の中で藩政を左右する政争へと連っていった。実学党のリーダー格である長岡堅物の家は代々家老職を勤めていたが、もともと筆頭家老職の松井家とは何かにつけて反りが合わなかった。その松井家当主山城・佐渡父子が学校党の頭目とみなされるようになるとごとく長岡家と対立した。藩内は両派に分かれ、もちろん勢力は学校党が絶対多数であったが、その対立・抗争は明治の廃藩置県まで続いたのである。

余談であるが、小楠の孫弟子徳富蘆花は『竹崎順子』大正12年(1923)。<sup>(17)</sup>の中で実学党と学校党の対立が熊本藩全体を巻き込む革新守旧の政争となっていく歴史を背景に小楠の後継者竹崎茶堂の妻順子の凜然とした生きざまを淡々と描写している。ちなみに、順子は蘆花の伯母で熊本女学校の校長を永らく勤め81歳迄生きた女傑であった。

実学党結成から2年後、小楠は銀杏城下水道町の部屋住みの六畳の居室を教場として私塾（小楠堂の前身）を開いた。藩士や豪農の子弟を集めて小楠の思想の根幹、学政一致論を説いたのである。最初の入門者は芦北郡の徳富一敬（蘇峰・蘆花の父）と益城郡の矢島源助（後に妹つせ子は小楠の後妻となる）で共に惣庄屋をつとめる豪農の息子である。以下、先述の竹崎律次郎（茶堂、日新堂主催）、嘉悦氏房（広取学校主催）、野々口為志（熊本洋学校開校に尽力）、内藤泰吉（古城医学校創立に参画。この医学校から北里柴三郎が出る）など後年、横井実学党の系譜を形成する俊英達が続々と門を叩いたのである。

十数年後、安政2年（1855）、小楠（47歳）は、熊本城

から南東7キロ余の田園地帯沼山津に居を移し住居を四時軒と名づけ、雅号を沼山と称した。前年兄が病死したため順養子として家督を相続し、妻や兄の家族を引き連れて万事生活費が安くつく農村に転居したのである。

この十数年間、天保の末から弘化、嘉永を経て安政の初めまでの間に日本の対外政策は激変するのである。

アヘン戦争起る。天保11年(1840)

小楠、酒失により帰国を命ぜられる。

幕府、異国船打払令を緩和。天保13年(1842)

阿部正弘、老中に就任。天保14年(1843)

徳川斎昭、隠居謹慎を命ぜられる。弘化元年(1844)

水野忠邦、老中を罷免される。弘化2年(1845)

小楠、『学校問答』を書く。嘉永5年(1852)

ペリー 浦賀へ来航。嘉永6年6月(1853)

プチャーチン 長崎へ来航。嘉永6年7月(1853)

小楠、「夷虜応接大意」を書く。10月日米和親条約締結。安政元年(1854)

小楠、沼山津に転居。安政2年(1855)

このような対外情勢の変化の中で、小楠の対外思想はいまだに後期水戸学的攘夷論の圏内にあつて、西洋近代の文化に目を開こうとはしないのである。例えば、嘉永3年(1850)に書いた福井藩士三寺三作宛の書簡を見ると、時期的に黒船来航以前ということもあるが、まことに意気軒昂に君臣上下・華夷内外の大義名分論を展開している。

「夫我神州は百王一代三千年来天地之間に独立し世界万国に比類無之事に候へば、譬人民は皆果、土地は総て尽き果て候ても決して醜虜と和を致し候道理無之候」<sup>(18)</sup>

さらに黒船来航に際しても親友の藤田東湖への手紙で「江戸を必死の戦場とさだめ、夷賊をせい粉にいたし、わが神州の正気を天地の間に明らかに示さずんばあるべからず」<sup>(19)</sup>(嘉永6年8月)と水戸学の大立物で親友という間柄もあるだろうが、後に開国論の急先鋒となる小楠とは思えぬ過激な攘夷論を吐いている。

しかし、同じ年の10月末にしたためたと思われる「夷虜応接大意」(ロシアの使節プチャーチン応接のため長崎へ下った旧知の幕臣川路聖謨宛に送られた書状)では、かなり柔軟になり、攘夷的スタンスから条件づきではあ

るが消極的開国論へ向けて半歩踏み出している。

「我国の万国に勝れ世界にて君子国とも称せらるゝは、天地の心を体し仁義を重んずるを以て也。されば亜墨加・魯西亜の使節に応接するも、只此天地仁義の大道を貫くの条理を得るに有り。比条理貫かざれば、和すれば国体を損ひ、戦は破れ、二ツのものの勢真に顕然たるは更に又云に不及事也。

凡我国の外夷に処するの国是たるや、有道の国は通信を許し、無道の国は拒絶するの二ツ也。有道無道を分たず一切拒絶するは、天地公共の実理に暗して、遂に信義を万国に失ふに至るもの必然の理也。然るに其有道と云るは、唯我国に信義を失なはざる国のみを言ことにあらずして、自余の国に於るも又信義を守り侵犯暴悪の所行なく、天地の心に背かざる国を云ることにして、比等の国ありて我に通信交易を望むに、我是を絶て拒絶するの道理あるべきや。我祖宗此理を明らめ玉ひ、唐・蘭の二国既に交易を許さるゝと云へ共、万国此理に暗くして、アメリカの書翰にも鎖国を以我国是の道也と述たるは、全く我国是の大道を知らざる故也。只外国のみならず我邦人も又鎖国を以て国体也とのみをもひ、信義の万国に貫くと貫ざるとの天地仁義を宗とする国是の大道を知らざるよりして、我信義を失ひ彼が念怒の心を起さしめ、大國体を誤るに到て、又如何んぞ是を救ふの術あるべきや。然ば今彼に答には、有道を許し無道を絶ち、国是の大本として一切鎖国するの道にはあらざる事を明に示し、然して後彼の渡来のさま、通信通商の望を許さざれば、軍艦を以て来り迫るの由を述、且は妄に浦賀に乘入、様々の無礼を働き、一切我法度を守らざるの無礼無道を責、如此の国は痛く禁絶するの大法なる事を論し聞せん、彼国叩頭して是を陳謝し前非を改め、通信通商を乞こと必然也。

——中 略——

我国毫も彼が強梁を恐れず、大義を明かにして彼を拒絶せば、夷虜不戦して畏服せざる事態はざる也。内を治め外を固く、軍艦守備を整へ、或は通信通商のさまの事は別に論ずる旨ありて爰に混ぜず、今只彼に応接するの大義を述るのみ也。其述る所といへども偏に応接の大綱領にして、其条目に到りては、機に臨み変に応じ綱領を

拡充して其節に当るは、全く其人に有り。爰に於て応接の人材尤選ばざるべからず。

夫、天地有生の仁心を宗とする国は、我も又是をいれ、不信不義の国は天地神明と共に、是を威罰するの大義を海外万国に示し、内天下の士気を振起して、器機砲艦漸を以全く備るに至りては、万国醜虜我正義に服従せざる事態はざるもの、何の疑かあるべきぞや。

聊鄙意を述て見る人に見せんと云ふ。」<sup>(20)</sup>

少し引用が長くなったが、この一文に小楠の常に「何が道理であるか」を求道する儒学者としての基本姿勢が明確に表明されているからである。

すなわち、日本外交の基本方針は、「仁義を宗とする有道の国とは交わり、侵犯暴悪を行う無道の国は拒絶する」ことであり、「有道無道を分たず一切を拒絶する」ことは国際社会で信義を失うことになる。真理は一つ、外交は天地公道に基づき信義をもって行うべきであるというのだ。正に、王道外交論である。この嘉永6年頃、未だ小楠は世界情勢について十分な知識を有していなかったが、なかなかの見識で、開国論までもう一步というところである。

それでは、小楠はいつ頃完全な開国論に転換したのか。弟子の内藤泰吉が後に著した『北窓閑話』<sup>(21)</sup>などによると、『夷虜応接大意』から約2年後、すなわち日米和親条約締結の翌年、安政2年〔(1855)小楠47歳〕、彼が沼山津へ移転した直後、『海国図志』という書物に接し目から鱗が落ちた如く思想上の大飛躍を遂げたようだ。

『海国図志』は、1838年、アメリカ人ブリッジメンがシンガポールで著した万国地理書で、これをアヘン戦争当時、清の將軍林則徐の命により漢訳、さらに洋務派の学者魏源がそれに諸書を輯録して『海国図志』と名づけ増補出版したものである。日本に輸入されたのは嘉永6年で、川路聖謨が部下の箕作阮甫（洋学者）と塩谷宕陰（漢学者）に命じ訓点を付け翻刻出版した。当時第一級の世界地理書といわれペリー来航直後の日本人の世界知識を拡げる上で重要な役割を果たした。ちなみに、佐久間象山、橋本左内、吉田松陰、安井息軒などもこの本から大なる影響を受けたらしい。

この『海国図志』を入手した小楠は数ヶ月もの間玩味

熟読し、門下生の内藤泰吉と研究討論した揚げ句、完全な開国論者へと脱皮したのである。「安政2年先生は開国図説によりいよいよ開国を主張されることになった。おれを相手に毎日談がはじまる。昼飯をわすれたことが百日もつづいた。先生は兵法で話される。おれは医術をもってこれに応じ、大いに啓発するところがあった。」『北窓閑話』<sup>(22)</sup>

開国主義者となった小楠の西洋文化に対する姿勢を他の開国論者、たとえば佐久間象山等と比較すると、小楠の西洋理解は科学技術文明に偏するものでなく、その背後にある西洋精神文化を積極的に評価しようとするものであった。

一例を挙げると、井上毅が筆録した『沼山対話』<sup>(23)</sup>元治元年（1864）の中で小楠は次のように語っている。

「今洋人の所為をみるに、火輪船・蒸気車・伝信器・水車・木綿等を始として、民生日用に便利のこと皆講究造作して其至極を究め、近来又紅海の海峡を堀りぬき海路とする等のこと誠に莫大の利なり。其上に万国に交通して交易の利を広くする故に、渠等国富兵強、民用の利厚くして租税等も至て寛なることを得たり。之其経綸の功業、聖人の作用を得たるものと可申候。

——中略——

井上毅問う。「洋人も仁の功業を得候哉。」

誠に仁の功用を得たりとも申され候。大凡仁の用は利を以て人に及ぼすにあることに候。」

このように小楠は、西洋の科学技術文明の発明・発見とその利用の基盤に、儒教でいう聖人の政治理想に似かよった西洋の政治精神を見出し、それはまた仁の徳の働きにつながるものと考えていたのである。

すなわち、小楠においては、テクノロジーのみならず、社会政治体制をも含めて西洋文明のインパクトが受け止められ、西洋近代の社会政治制度や思想を導入する方向に向って儒教が再解釈されたといつてよい。

他方、松代藩出身の儒学者佐久間象山の場合はどうであろうか。象山は、天保4年（1833）、小楠に先ずること6年、23歳で幕府官学林家に入門し、29歳で江戸神田お玉池に私塾象山書院を開くという儒者として抜群の秀才であった。天保13年（1842年）、藩主の期待に答えるべく



西洋式砲術家江川英竜に入門し自力で翻訳洋書を読破して、新しい学問の世界に入り「日本的規模で考え行動することを知った。』『省録』すなわち象山は兵学を学ぶことによって、自己の学問観を大きく転換させたのであるが、そして更にこと兵学に関する限り西洋が圧倒的に優れていることを認識したのである。

「君子に五の樂あり。——中略——西人が理窟を啓く後に生まれて、古の聖賢いまだ嘗て識らざるところの理を知るは、四つの樂なり。東洋道德、西洋芸術、精粗遺さず、表裏兼該し、因りてもって民物を沢し、国恩に報ゆるは、五つの樂なる。』『省録』<sup>(24)</sup>安政元年(1854)この有名な言葉が語るごとく、象山における儒教的視座の変革は、主として科学技術の領域に限定されていた。

すなわち、象山の開国論は、幕末維新时期特有の攘夷意識の裏返しであり、一言でいえば兵学的見地からのもの、つまり富国強兵のためだけのものであった。象山は『省録』より12年前の天保13年(1842)、当時幕府の老中で海防掛を担当していた主君の真田幸貫松代藩主に「海防八策」を建議し、西洋式の火器を大量に製造すること、洋式軍艦を購入して強力な海軍を育成することが焦眉の課題であると論じている。そしてその建策は、象山の妻順子の兄勝海舟に受け継がれ実践されるのだが。このような経緯からも解るように、象山の開国論の究極の目的は「終に五州を巻きて皇朝に帰す。皇朝永く五州の宗となる」『省録』ことにあったのだ。

敷衍すれば、象山にとって西洋の文物の導入は、孫子の兵法「知彼知己、百戦不殆………不知彼知己、每戦必殆」『孫子』(謀攻篇)の戦略に発しており、西洋の長所、テクノロジーを摂取することによって西洋諸国と対抗することを意図したものである。

「『力を同じくすれば徳を度り、徳を同じくすれば義を量る』。文王の美を称すといえども、また『大国はその力を畏れ、小国はその徳に懐く』といふに過ぎず。その力なくして能くその国を保つものは、古より今に至るまで、吾いまだこれを見ざるなり。誰か王者は力を尚ばずといふか。

彼を知らず、己を知らざれば、戦ふごとに必ず敗るるは、固よりなり。しかれども、彼を知り己を知るも、今

の時にありては、いまだ戦を言ふべからず。悉く彼の善くするところを善くして、しかも己の能くするところを喪はずして、しかし後に始めてもって戦を言ふべし。

詳証術は万学の基本なり。泰西この術を發明し、兵略も大いに進み、けい然として往時とは別なり。いはゆる下学して上達するなり。孫子の兵法の度・量・数・称・勝も、またその術なり。しかれども漢と我とは、孫子ありて以来、誦習して講読せざることなくして、その兵法は依然として旧のごとく、泰西と比肩するを得ず。これ他なし、下学の功なきに坐するなり。今真に武備を脩飾せんと欲せば、先づこの学科を興すにあらずんば、不可なり。」(前掲書)<sup>(25)</sup>

このように象山は、西洋のテクノロジーの基本が詳証術(数学、オランダ語のWiskundeの訳)にあること、数学を興して軍備を整えなければならないことを力説し、小国日本が国力を蓄積して西洋諸国を圧倒し、ついには世界の覇者となることを夢に描いていたのである。

それではここで、小楠の開国論を主著ともいべき『国是三論』でもう少し詳しくみてみよう。

『国是三論』は、万延元年(1860)2月(小楠52歳)、三度、福井藩主松平慶永(春嶽)の招聘を受けた小楠が、当時、改革、守旧両派の対立する福井藩内の主義方針を一定させ挙藩一致の体制にすべく提出された意見書である。小楠は広く藩内の意見を徴し討議した末、富国・強兵・士道の大綱とする方針を決定したが、以後この意見書が福井藩国是として遵奉されることになる。

「天地の氣運と万国の形勢は人為を以て私する事を得ざれば、日本一国の私を以て鎖閉する事は勿論、たとひ交易を開いても鎖国の見を以て開く故、開閉共に形のごとき弊害ありて長久の安全を得がたし。されば天地の氣運に乘じ万国の事情に随ひ、公共の道を以て天下を経綸せば万方無碍にして、今日の憂る所は惣て憂るに足らざるに至るべきなり。」

「通商交易の事は、近年外国より申立てたる故、俗人は是より始りたる如く心得れども、決して左にあらず。素より外国との通商は交易の大なるものなれ共、其道は天地間固有の定理にして、彼人を治る者は人に食はれ、人を食ふ者は人に治らるゝといへるも、則交易の道にて、

政事といへるも別事ならず。」<sup>(26)</sup>

象山の開国論が前述した如く、兵学的見地からのものすなわち富国強兵のためのものであったのに対し、小楠の開国論は、ここに見られるように開国自体を目的としたものである。小楠にとって開国や通商交易は正に「天地間固有の定理」であったのだ。

もちろん小楠も富国強兵の必要性を十二分に認識していた。それは、この『国是三論』の構成が、天——富国、地——強兵、人——士道の天・地・人三つの柱より成っていることから解かる。

しかし、小楠の経綸は、西欧的なものをトータルに否定する攘夷論者が主張する「神州不易の道である鎖国」<sup>(27)</sup>を墨守するための富国強兵論では勿論ない。例えば、昌平黌の朱子学者大橋訥菴が『關邪小言』<sup>(28)</sup>安政4年(1857)で、華夷の弁をなし国体の尊嚴を力説し且つ朱子の窮理説に基づきその關邪に倣い洋学を排斥したことは、よく知られているが、その「神州不易の道である鎖国」を、小楠は「日本一国の私」、「公共の道」に悖るものと指弾し、「何ぞ富国に止まらん、何んぞ強兵に止まらん、大義を世界にしかんのみ」と力を超えたものに政治の究極の原理を見い出していたのである。

以下(一)横井小楠——朱子学の近代的開眼——②へ続く。

## 注

- (1) 『熊本バンド研究——日本プロテスタンティズムの  
一源流と展開』同志社大学人文科学研究所。(みすず  
書房・1965年)
- (2) 『大江義塾沿革史一斑』徳富蘇峰。
- (3) 『小楠遺稿』横井時雄。(民友社・1889年)
- (4) 同書
- (5) 『増訂象山全集』信濃教育会。(信濃毎日新聞社・1935  
年)
- (6) 『肥後藩国事史料』伊喜見謙吉。(稲本報徳社・1932  
年)
- (7) 『横井小楠』山崎正董。(明治書院・1938年)
- (8) 同書
- (9) 同書
- (10) 同書
- (11) 同書
- (12) 同書
- (13) 同書
- (14) 同書
- (15) 同書
- (16) 『小楠遺稿』横井時雄。(民友社・1889年)
- (17) 福永書店。
- (18) 『小楠遺稿』前出
- (19) 『日本思想大系 55 渡辺華山・高野長英・佐久間  
象山・横井小楠・橋本左内』(岩波書店・1971年)
- (20) 同書
- (21) 『横井小楠』山崎正董。(明治書院・1938年)
- (22) 同書
- (23) 『日本思想大系 55 』前出
- (24) 『増訂象山全集』前出
- (25) 同書
- (26) 『日本思想大系 55 』前出
- (27) 『明治文化全集 15 思想篇 「關邪小言」』明治文  
化研究会。(日本評論社・1967年)
- (28) 同書

## 参考文献

- (1) 「横井小楠関係文書綴」(全22巻)熊本県立博物館  
蔵。
- (2) 『肥後藩の政治』圭室諦成。(日本談義社・1956年)
- (3) 『熊本の近代思想』圭室諦成。(日本談義社・1966年)
- (4) 『徳川合理思想の系譜』源了園。(中央公論社・1972  
年)
- (5) 『佐久間象山』宮本仲。(岩波書店・増訂版1936年)
- (6) 「横井小楠の実学」(『哲学研究』37巻11)源了園。  
(京都大学文学部・1955年)
- (7) 『日本近代思想の形成』植手通有。(岩波書店・1974  
年)
- (8) 「横井小楠の理と格物について」(日本倫理学会編『日  
本における理法の問題』)本山幸彦。(理想社・1970  
年)
- (9) 「日本における儒教的理想主義の終焉——(三)」(『思  
想』第592号)松浦玲。(岩波書店・1974年)
- (10) 「天保期熊本藩政と初期実学党」(『熊本史学』第43  
号)鎌田浩。(熊本大学・1974年)
- (11) 『近代日本の形成と西洋経験』松沢弘陽。(岩波書  
店。1993年)
- (12) 『日本における近代思想の前提』羽仁五郎。(岩波書  
店・1949年)
- (13) 『忠誠と反逆』丸山眞男。(筑摩書房・1992年)
- (14) 『福沢諭吉全集』慶応義塾。(岩波書店・1958年——  
1964年)
- (15) 『西周全集』大久保利謙。(宗高書房・1960—1966年)

平成7年5月末日脱稿

塚本学院教育研究費補助使用論文